



I. はじめに

分散会の基調提案では、協力者から報告集の分科会基調をもとに、それぞれの地域や立場での実践を報告し合い、討議課題に基づいて討論を進めたい旨を確認し、はじめた。

II. 報告に対する質疑の概要

—報告1—①

「多度津町における研修・啓発の取組について」

(香川県同教)

三重 多度津町における人権問題は何か。

報告者 担当課において関わっていることはそれぞれ、子ども課だったら子どもの人権、住民課だったら身元調査だ。

三重 それに対して学校や行政はどのようにとりくみをしているのか。

報告者 教職員を対象としたとりくみ、町職員を対象としたとりくみ、仲多度郡内で協力したとりくみを行っている。

三重 職員の研修に対して、職員がどのような変化・行動につながっているのか。住民にはどのような姿をめざしているのか。

報告者 働きかけをしていくことが行政の役目。知識を習得できてもどのように行動していくかは現在できていないので課題だ。

大阪 枠組みはできていても問題は中身が重要ではないか。県内で啓発する立場の人における差別事象とは。それに対してどういうことをしていたのか。

報告者 2例、県内でほかの市で起こった。市営住宅内での無断駐車をやめさせるチラシに、「同和地区関係者以外の駐車禁止」。それ以降、フィールドワークなどの研修。市に結婚前提に交際している人に、住んでいるところから結婚に反対されるとの相談、指定区域外だから大丈夫との返答。それ以降、研修等を実施した。

大阪 調査をどういかしたのか。

報告者 情報発信、階層別研修、身元調査は、どのような理由でも差別につながる、多度津町起業推進協議会において、ハローワークから指導、本人通知制度の普及活動を行った。

三重 多度津町では、住民が差別をなくすための活動はあるか。

報告者 生涯学習課、教育総務課、住民環境課、三課が連携してとりくんでいる。

香川 住民環境課の中に人権係がある。主には町の広報紙やHPで啓発を行っている。8月に人権週間で、町立図書館で特集コーナーを設置した。

三重 差別をしない・させない、子どもを育てるためには、学校だけでなく、地域でとりくみが必要。多度津町として、HP、広報紙、後援会だけでなく、どのように住民にしていかに啓発活動をしていくのか。

香川 部落解放の団体の会員の方に対するよびかけ、会の中には自治連合会や老人クラブ、PTA 連絡協議会、婦人連絡協議会などが構成員に入っていて、その方たちを通して講演会などのよびかけを行っている。

三重 意識調査の中に研修会への参加の割合などは聞いたのか。

香川 2020年度に行った調査では、692名中1回は36名、2回42名、3～5回66名、6回以上64名、全然ない462名、無回答22名であり、8月の人権講演会では64名参加した。

三重 自分自身は地域住民として啓発を行っているが、多度津町ではそのようなことはあるのか。

報告者 地域の方主体で活動していることはあまりないが、外国人が多くいるので、国際協力協会などが日本語指導の支援などを行っている。

三重 行政職員に向けた研修でインプットした職員は家庭や地域に返していっているのか。

報告者 自分自身そういう認識をもてていなかった。

三重 インプットしたものを、住民に返さないところでアウトプットするのか。公費をわざわざ使った研修なので、アウトプットする必要があるのではないか。

報告者 現実的にアウトプットできているか検証ができていないので、今後、対策を考えていきたい。

高知 他の職員はわからなくても、報告者自身は返しているのか。

報告者 人権問題について、家で話すこともある。研修等での学びを伝えている。

福島 教職員の研修等で同和問題に関する研修や授業はなかったのか？

香川 教職員、県費約130名、町費で60名いる。毎年、各校の持ち回りで実施、昨年度、県の同和問題に関する職員に向けて研修、ワークショップを実施。今年度、アサーションに関するワークショップを実施した。

徳島 教員向けに対して、行政も参加することはあるのか。

香川 人権担当等には声をかけているが、それ以外はスペースのこともあって入っていない。

徳島 2020年度から5年たっているが、とりくみを通してどのように若年層の意識はかわっているのか。

香川 令和3年度で県のハンドブックで回答しても

らった。年度初めにとりくみをお願いはしているが、今年度のアンケートで変容をみとる予定だ。

千葉 職員の研修等を行う際の、職員の理解度や、当事者の声を反映しているのか。

香川 臨地研修で、その人の思いや話をきいている。各学校でのとりくみのため、教育委員会で教職員のフィードバックは把握していない。

三重 報告者自身が、人権に関するとりくみの必要性を気づいたきっかけは。

報告者 人権問題はさまざまな多様性にとんでいると研修で感じた。今回、地域へのアウトプットということに関して、思っていなかったのが、今日インプットしたことをもちかえり、今後アウトプットしていきたい。

—報告2—③

「ふたたび、「子どもたちに学校を返す」

(大阪市人教)

大阪 夏の学習会やにんげん展以外に定期的に行っていることはあるのか。

報告者 アトリエシアター(今までの映像をみながら、専門家に話をきく)や猿回しの方に来ていただいたり、漫才の方に来ていただいたり、太鼓のかわはりの実演を実施。にんげん展にあわせた、特別企画などを実施している。

大阪 なぜ、(机上に)太鼓を置いているのか。

報告者 太鼓づくりを教えてもらった際の太鼓である。東京の浅草で皮革製品を集めている資料室や皮について勉強しながら太鼓をつくる体験に参加者にしてもらった。体験したことを教室に持って帰ってほしいと思っている。

兵庫 子どもたちからはどんな声があったのか。

報告者 太鼓づくりはおとなが中心。直接、子どもの声はきいていない。にんげん展での丸木さんの絵をみて、多くのこどもは「こわい」と言っていた。絵が自分の方をみている。恐ろしさよりは、迫力があり、絵の存在感に圧倒されている、畏敬の念のようなものがあると思っている。

愛媛 市教委や府教委の教育方針に対する市民運動などの動きがあるのか。

報告者 自分たちの活動は特定のものにフォーカスしているのではなく、間接的に学校教育を支える社会教育としての市民運動だと思っている。大阪市・大阪府の流れを現場の実践にいかしていけるようにしたいと考えている。

愛媛 保護者、地域などが動いていかないと体制がかわらないのではと思った。

報告者 見えるとりくみはない。同和教育運動に関しては、子どもたちが教室で学んだり、困難な子どもたちが目の前に現れた時課題を解決していかなければいけない。福祉の問題など制度をどうにかしてよくしていったり、教職員のありようなど、何かに反対するのではなく、変えていくことが運動だと思う。会としては直接的に何かしていないが、行政などと向き合うことが必要だと思う。

愛媛 報告の最初は、市の教育行政に関する批判と感じたが、今やっている活動を市民運動としてとりくんでいって、最終的には政治が変わらないと大きく変わらないと思う。何か政治に影響することをねらっているのか。とりくみが政治へのアプローチにつながっているのか。活動に対して、横やりが入ってきたことはあったのか。

報告者 教職員向けの研修会を行っている。同和教育の実践をやる時に、今の大阪市の学校でやることはむずかしくなっている。とりくむこと自体がそれぞれの教員にとっての戦いになっていく。教員にとっては、学校内で、子どもたちのために教材を提供していくことも闘いだ。

三重 「子どもたちに学校を返す」の返した先の展望は。

報告者 まずは、子どもの声を聞く。聞いた声にこたえていく。その声も多様で、声の一つひとつこたえていけるような活動が意味のあること。返していかうとする過程に意味がある。

奈良 部落産業がどんどん見えなくなっている。ムラの文化や産業を子どもたちにみせていくとりくみをしていけば。

報告者 子どもに直接アプローチしているのではなく、教職員や地域の方が、アトリエシアターの活動などの中で学んだことをもち帰ってもらっている。猿回しや伊勢漫才などをみてもらって何が部落問題につながっているかを考えてもらいながら、情報を提供して、その先にいる子どもたちにつながっていつているのではと考えている。

大阪 現場は教職経験10年未満が半数を超えている。細々とは、にんげんを使った実践はあるが、学年・学校全体でなかなか理解が進まない。その中で、アトリエ西浜のような場所を教職員が知ることも大切だと思う。

三重 同和教育は同和教育運動と先輩教員に教えてもらった。一昨年度この分科会で報告していて、「団体を構成する個人として差別をなくす生き方をどうしてきたか」というキーワードがあって、報告者の方にどう思っているのかを聞いてみたい。

—1日目の総括討論—

三重 去年の大会で、社会教育でレポートあげた(4度目)。職員で啓発に行きたくない、インプットしたことをアウトプットしたくないという職員がふえてきている。行政職員は、ただで時間内に勤務で聞くことができる。自分だけとりこんで、やっているといつても、住民は理解しない。人権啓発特別懇談会を毎年行っている。25の自治会を支所の行政職員7人が一人4回で回っている。まとめ・記録などは行政職員が担っている。人権問題に関する意識調査を伊那市は同和地区に関する生活実態調査を3回やっていて、2000年に隣保館のニーズ調査を行った。自分自身は、調査する側でもあり、調べられる側でもある。行政職員として自分を問われる、自分事として自分に課さないといけない。

三重 香川県の報告から、部落差別解消法の認識について職員が4割知らない現実、なかなかきびしい中で研修をおこなわなければならない。現状としては、インプットが必要なのかと思った。自分の市では、インプットをたくさんしているが、アウトプットをなかなかできていない現実。話す訓練ができていないことが課題。まずは、自分ができることが大事、次に、住民に説明できるようにならなければならない。アウトプットの勉強もしなければならない。まず、教職員や市の職員の理解をあげて、職員間をつなげて、住民に広げていくプロセスが必要。身元調査について、3割の職員がしてもいいと回答している。企業でも勤務調査ととらえられていると説明があった。住民に身元調査を説明しても、広い意味でとらえられていることもある。もしかすると、真意的な部分がずれてとらえられているのではないのかと思った。「自分事としてとらえられるよう啓発活動」、職員の86%が何とかしたいと思っていることは希望。インプットをアウトプットをどうするかを問わないままでは、職員も逃げていってしまうと思うので、スモールステップでやっていくことが大切だと思う。

愛媛 自分自身は加差別部落に生まれた元教員と捉えている。話を聞いていて、家族や地域の方に、アウトプットするというをどうしてそんなに簡単に言えるのか不思議。父親は差別に縛り付けられていた。自分は25年間逃げていた。その背中を押してくれたのは、子どもたち、地域のおじさん。子どもは、必死に差別問題に向き合っていた。子どもたちの姿が自分の背中をおしてくれて、部落差別に向き合い、父親と話をし、父親は10年かけて変わってくれた。一番大事なのは、自分事としてとらえられるかどうかではないか。手法ややり方の問題ではなく、まず、どこに向き合うかは、家族や自分の地域の人。自分の家族などに差別問題を話すことはすごく力がある。自分は自分事としてこの問題に向き合っているのかと考えていると、どうやっていけばいいかもおのずと見えてくると思う。差別問題・不登校問題をかつては社会的な問題ととらえられていたのが、だんだん個人的な問題においやられているように思う。社会の意識や政治的な問題であって、個人の問題ではないと考えていく必要がある。アトリエ西浜の活動の先に、社会を変えていく、政治を変えていかなければ、子どもたちのためにならないと思っておくべきだと思う。言ってしまうと、知らないところでたたかれることもあるが、もち続けてほしい。

大阪 この分散会に40年毎年来ています。2002年以降、特措法がなくなってから地域からの報告がほとんどなくなっている。特措法が終わって以降、部落に関わる人が主体的な形で参加できていないのか。部落に住む人が一般の方と同じぐらいの知識をもっていない、差別に関するいかりや悲しみはもっている。どう発言していいか学ばなければならないが、学べていない。部落のわれわれも苦労しな

なければならない。行政のとりくみの枠組みの中に、部落の人はどのように関わっているのか。部落問題で、誰が犠牲になっているのか、どうやってわかるのか。「わたしです」といえる力をつけていかなければならない。

大阪 生まれは香川で外に出て地元の地域の差別に関して感じた。祖父母は、差別は必要悪と話している。父親は最初の結婚はあきらめた。子どものころからあそことはかかわるななどと言われた。高校の時に、部落差別について勉強してはっと気づいた。香川県で大正時代に教育差別があって、それに反対した保護者が学校休ませるということがあったり、昭和時代に結婚に関して部落の子が誘拐したとなったり、根強い差別意識がある。啓発しようとしても、差別に跳ね返されてしまっている。若い先生が部落問題を学習をしたいといっても、なかなか賛同されない。小中の教職員15人ぐらい集まって、部落問題との出会いを語ってもらい、やっとじっくり話をできる場所があると感じた。忙しい中でも、時間をつくって学習したり、出会いを続けていくしかないのかと思う。ここに集まっている人は、少なくとも自分事としてやってきていると思うので、それぞれのとりくみについて教えてほしい。

三重 子どもたちが地域へ帰ったときに、子どもたちが安心して頼れるおとなが多いか？自分は地域でどんだけがんばっているのかと思い、とりくんでいる。住民自治会で考えていかなければいけない。住民自治の中で人権の視点でとりくんでいく。人権三法がでたときに、自分たちの地元の実態を知らなければと、行政と同じような内容で人権意識調査を行った(2017年)。20歳以上の全員対象で行った。2600人中1600人ぐらい却ってきた。70代が一番回答率多かった。同和教育を受けていない世代が6割以上答えている中で、自分の子どもの結婚に対して反対が4人に1人、身元調査をしてもいいが5人に1人いた。結果を知らされない顔が浮かんでくる。一人でもいたらだめだと思う。そのためにまちづくりがある。まちづくりは人づくりだと思うので、住民自治の中でやってきた。推進委員をあつめて集計をもらい、自由記述欄をみて、こんな実態があるのかと話をしてくれていた。生の課題がみえてくる。こんなやっただけでどうするんだと匿名の電話もかかってきた。やっただけで、ダイジェスト版を出せばいいわけではない。悲しむ人もいる。出すなら一つ一つ丁寧に話して返していかないといけない。顔の見える、くらしの見える思いを話していかなければいけない。思いをつないでいくことがまちづくりにつながっていくと思う。

三重 八日市市の中学生に自分自身が部落差別に加担していたと簡単に語っていたなと思ったが、簡単には言っていないと思う。アウトプットや還元を得ないと自分自身のものにはならないと思った。香川県の意識調査が報告にのっていたが、それを受けての展望をもっと聞きたかった。子どもどうしが語り合いの中で、こうやって差別はなくしていけ

るのかと実感させることを教職員はしなければならぬ。自分自身は、差別をしていないと思い、人権課題に向き合わず生きてきた。地域の人に出会って、自分の中の差別意識に向き合った。自分にとっての身近な人権課題から解放される感覚も感じた。報告者にも自分自身を問い直したことを語ってほしい。

三重 インプットやアウトプットは自分自身の課題でもある。自分の住んでいる地域で、差別事件がおこり、隣保館がたてられ、第一号職員として異動した。まわりの職員からはかわいそうに、家族からもかわいといわれた。毎日、勤務することもつらいと感じた。自分のもっている部落に対するイメージとむらに人の思いに違和感をもった。ムラの人から「かわいそうに、早くかえてもらい」と言われて、何も返せなかった。自分自身の差別性に向き合う中で、自分自身が学んだことを家族に伝えた。いろいろなことで啓発事業をしていくと参加者はそれなりに受けてくれる中で、家族はまともなうける。自分の住んでいる地域の中で、人権を考えるととりくみをすすめていこうと話してとりくんできた。予算化もして研修会をしたりしたが、毎年メンバーが変わる中でなぜそんなことをしているの？と言われるが、それを乗り越えていかなければならない。最近、研修で学んだ中で、自分じゃない人がとりくんでくれるようになっていく。次の行動をどうおこせるのかが今の課題で、もう少し先を見すえていかなければならない。

鳥取 隣保館職員をスタートに運動にかかわってきた。当初は相手のことを考えず、研修を行っていたが、それでは納得してくれないと感じた。もっとちがった問いかけをしていかなければならないと相手も納得してくれないと思った。今は、公民館長をしていて、6:4でムラの人が多い。つながりをつくっていく立場にある。啓発には、人間は尊敬されるものということをおぼえてはいけない。世代が変わっていく中で、互いがどうつながっていくかを創造していくことが課題。

三重 昨日、自分が住んでいるところの人権にかかわる地区懇談会を行った。もともと教員だが今は住民に関わって活動をしている。兵庫が作った「大切な人」というSNSに関わって部落差別や外国人に関わる差別があるというものをみて、グループワークを行った。地域のある方が、「わたしの中には、心のタトウがある。小さいころに部落差別の意識をうえつけてきた」と話していた。学校で、正しいことを学び、差別をすることがはずかしいことなんだときちんと教えていくことが大切と話している人もいた。そんな子どもたちが育つ、家庭、まわりのおとなが反差別の感覚がないと子どもも差別者になってしまう。そのために人権啓発をやっていくことは、人権教育とセットで考え、みんなが安心してくらせる地域にしていきたいという思いがある。教職員になりたてのころに、自分自身の差別心に気づき、地域で活動してきた。自分の職場+α自

分の住むところで活動をしていってほしい。一人の人間として活動をしていくことが大事なんじゃないかと昔言われた。

—1日目のまとめ—

1本目の報告では、調査から広げていこうとしていったこと、2本目では、市の状況から、教職員に対してとりくんでいっていた。その根底には子どもたち、教職員、保護者の意識が低下しているのではない、危機感がある。特に、部落問題に関しては顕著なのではないかという課題意識がある。啓発や、教育のとりくみを通して、学んだことをどのように活動していくのか。活動を行うにあたっては、自分自身がどのように向き合っていくのかを今一度問い返していくことが大切だ。それは、自分自身の部落との出会いを語ったり、くらしでつながることで見えてくる。自分の知らないところに伝えられても、自分の身内に伝えていくことはきびしいという発言もあったが、自分自身の反差別の行動が次の世代につながるという展望が発言から強く伝わり、この場で学び合うことが大切であることが確認された。

—報告3—②

「識字の原点を受け継ぐ」(大阪市人教)

岡山 NHKの番組を見て会いたいと思っていた。報告者 つれあいの靴直しを手伝いに行くようになった。識字に誘われたときに、習いに行きたいと言ったら、つれあいは「今さら、字を習ってどうするのか、靴直しに学問はいらん、字を習って腹がふくれるのか」といった。自分は字が習いたいとの思いがあったので、お酒をたくさん飲ませて、寝ている間に識字に行っていた。

三重 識字に通っていて、一番うれしかったことはなにか。

報告者 普段から作文を書いている、文集に載ったことがうれしかった。

報告者 靴直しをしているときに、配達へ行ってきたと言われてもわからないことがあった。だんだん文字がわかってきて、一人でどこへでも行けるようになったことがうれしい。

報告者 仕事していて、識字に行くようになって、友だちができたことがうれしかった。みんなに読んでもらえるように考えながら作文を書いて、文集になったときうれしかった。

高知 人が減って二人で活動をしていて、自分のためになぜみんなが来ないのかと話していたが、寒いだけでなく、識字に対しての偏見などが識字を学ぶ意欲を低下していったのではないか。二人になったときのつらさや、なぜかというところでもわかることがあれば教えてほしい。

報告者 部落の人たちは、学校へ行けば差別され、教室ではよけものにされるといふことがしょっちゅうあった。給食代を忘れたら後ろにたたされ、給食が食べれないので午前中だけ勉強して、午後から

帰ったりと、そのような目にあって、家で手伝いをしている方がましかなと思うこともあった。識字に対する偏見ということは、あまり考えられなかったと思う。家の手伝いをしなければならなかったりしていたと思う。最初27人いた時、学校の門くぐったことがなかったり、ほとんど文字が書けなかった。明日、画用紙をもって来るように学校で言われて、用意できなくてそれっきり学校へ行けなかった人もいた。

香川 いろいろな経験から今の学びがあると思った。本を読めることや字をかけることの喜びを子どもたちや保護者にも教えていきたい。今の子どもたちに伝えたいことがあれば教えてほしい。

報告者 自分は家で漢字ばかり書いていて、得意になった。学校に行かなくても好きなことをしたらよかったと思う。学校に行って、友だちをつくるだけでもいいと思う。

報告者 小さいときにチラシに半紙を置いて、文字をなぞっていた。その時、文字は楽しいと思った。子ども食堂に携わっていて、それぞれの食材の切り方などを教えていて、小学校3年生でも魚の3枚おろしもできるようになっている。自分たちで料理をつくってみんなで食べる楽しさなどを伝えてきた。紙芝居をみんなで楽しんだり、話の内容について一生懸命応えてくれる。セミが飛び立つところを観察したり、いろいろなことを子どもたちと一緒に経験していきたい。子どもたちに、自分の子どもの頃の話伝えたり、薪でご飯を炊いたりしてみたい。

報告者 60歳を超えて、字を学んだ人が、字を書くことの喜びを楽しんでいた。ここへ来たら楽しいと話していた。子どもたちが学習や友だちをつくることを楽しめるような雰囲気をつくっていくことが大切だと思う。

三重 「靴直しに学問はいらん、字習って腹がふくれるんか」という言葉から、差別の現実を感じた。つれあいさんがそう言わざるおえない本当の思いがあったのではないかと。

報告者 つれあいは大正生まれで、考えはすごく古かった。解放同盟側ではなかった。自分が識字に行きだして、識字のことを家でやっている子どもたちがよってきて、一緒に宿題をしてにぎやかにしていたら、つれあいは、「楽しそうやな、今日は何習ってきたん？」と言うようになってきた。住吉は通信制をしていて、つれあいも学校へ行けていけなくて、通信制をするようになった。「親のせいでも自分のせいでもない」とだんだん差別がわかってきた。その後、親子5人で解放運動をするようになった。娘は中3で部落宣言をした。

愛媛 今の子どもは、字が書けてあたりまえ、読めてあたりまえになってきているが、人を傷つけるために平気で使っていることもある。そのような状況に対して、どう思うか。

報告者 それだけではないと思う。自分たちが心配することではないと思う。さまざまな要因があり字

だけで人を傷つけるわけではないと思う。

報告者 スマホなど子どもも早くからもつようになり、SNSでいじめも増えていると思う。おとなも子どもにもたせるときに、しっかりは話をしないといけないと思う。

報告者 識字の問題と言葉の使い方をわけて考えた方がいいと思う。

—報告4—④

「人文協活動を通して私たちが得た経験と大切にしている思い」(三重県人教)

大阪 人文協はどのような組織か。

報告者 教育委員会の委託を受けて成り立っている。

大阪 保護者の組織としてはどれぐらいのものなのか。

報告者 保護者の組織というわけではなく、子どもと一緒に保護者がかかわっている。

三重 乳幼児8名、なかまづくり学習会23人、Mスタ29人の保護者が登録してくれている。10年以上前は学校や行政が活動を中心に進めていたが、今は地域住民が中心となって子どもたちのことに関わってくれている。

福岡 活動に学校の教員は参加しているのか。

報告者 小学生のとりくみで学習会が毎週金曜日16:30~17:30に行われている。後半の時間部分に報償費をつけるという形で学校の先生の保障をしている。人推の先生が3人ぐらいと何人も来てくれている。中学校のMスタは、完全に時間外のため、自主的に見に来てくれている、平均的には2人程度来てくれている。

福岡 どのように先生たちを呼びかけているのか。
三重 地域の小学校教員だ。低学年が人数多くなってきている。学校の方で人手が少ないときや行事がある時などに呼びかけている。

愛媛 自分の中での変容を教えてください。

報告者 四日市大会、三重県大会、全国と報告をしてきて、三重県大会の司会の方に自分の話をしてほしいと言われて、もう一度自分自身についてふりかえり、今の自分がいるのはまわりの仲間のあたたかさを感じて、自分ももっとがんばらないといけないと感じさせられた。

報告者 四日市大会では、活動について話していて、質疑でそのように思ったことはなぜなのかと問われ、三重県大会では差別にどこで気づいてどうやって自分を形成してきたかを教えてくださいと言われ、文字に起こすことで、自分の歩みをふりかえり、確認できた。

愛媛 保護者学習会について、どのような参加か。

報告者 仕事で来られない方もいるが、半数以上参加していて、はじめての方も多いため、自分の日常の思い込みや偏見について話しあい、同和問題に限らず、自分の差別心に気づいてもらうところから入っている。近い家族間で自分の本音への気づきなどを話している。

大阪 保護者学習会にムラの人ほどくらい参加しているのか。

報告者 昔は地区の方だけだったが、差別をしているのはまわりだとなった時に、地区外の人がかかりと考えないといけないんじゃないかとなり、ムラの人でも地区外の人と一緒にいる。

—2日目の総括討論—

岡山 NHK の部落問題についての映像をみて、三者交流(行政・学校)の同和交流を行っていて、そこでも使っている。学校の先生も見てよかったと話していた。なかなか、まとまって話す機会がないので、今後も続けていきたい。

三重 自分の母も識字生で耳が聞こえない中、週に1回識字をしている。大阪にも来て交流をしたりもした。祖母も文字書きができていなかった。祖母もできていたら、今日報告していただいた方のように、何か伝えられることがあったのではと思う。三重県大会で今日の報告の司会をして、過去の自分を思い出した。公務員の前に民間の会社員をしているときに、結婚差別があった。逃げた。逃げた先には、同年代がいっぱいいた。1995年にライトピアができて、恩師と話をしているときに、「俺らががんばりきれないから、まだ、お前らにがんばらさなあかん、すまん」と言われた。誰かのせいではなく、聞いていてつらかった。自分より若い人たちも今活動をしている。後で気がついてほしくない、つらい思いをしてほしくないと思い、今日の報告にもかかわってきた。

三重 自分は地区出身で、ここに参加している人は、差別をなくす仲間だと思って参加している。部落差別が今も残っているのは、部落にルーツのない人の責任だと思っている。自分の母は、地区内の人としか、部落差別の話ができなかった。自分は、今日の報告者たちともできる。同推協がぶれることなく、部落問題についてともに考えてくれたからだと思う。そして、一緒に人文協活動をしてきたからだと思う。地域の身近な人たちとつながるために一人ひとりが行動していくことが大切。

三重 自分は報告の地区に住んでいないが、自分の地区の地区懇談会で住民として、ムラの人ともそうでもなくても一緒に地区懇談会をまわって、学習会をしている。報告の地区で、自分の時の学校主体、行政主体から、地域主体になって、そこを卒業した子どもたちもスタッフになっていると聞いている。

三重 人文協の活動に参加してきた子どもたちが、中学校の子どもに大学や高校生が教えていたり、地域で応募してきてくれて学生がほとんど。地域の子もたちにつながってきている。自分の子どもも夏にしているデイキャンプに来たり、「ようこそ先輩」というMスタの中で、自分がなぜこの高校を選んだのかなどのお話をスタッフに参加したりしている。

愛媛 心配なことが2つある。1つめは、同和問題

の扱いがいろいろな場面で減ってきている。人権啓発指導員をしていて、地域にでかけても、多様な人権課題が先にでてきて、同和問題をそっとしておいてほしいという声も根強くある。同和問題が後回しになってしまわないかと心配している。学校でも、積み重ねがないと授業実践ができにくい現状がある。どんどん薄れていって解決しないままになってしまう。正面にすえて同和問題をはじめとする多様な人権課題に向きあっていかなければいけない。2つめは、愛媛の大会で、原稿を読み上げるだけの発表に批判があった。どういう風に自分事として受け止めているのか、もっと熱をもたなければいけないのではないのかという声があった。香川の報告で、サポート体制がしっかりしていると思った。愛媛の大会では、サポートもなく、一人で報告していた。本来であれば、共有して、実践を支え合った仲間と一緒にいる必要があると思う。自分の地区では、年齢層が高くなり、後継者問題がある。経験が浅い人への実践について、厳しい声があった。冷たいのはよくないが、厳しい声は必要だと思う。これから支えていく若者を、どういう風にまわりが育てあげていくのかが、自分たちの使命。非難批判だけでは、若者は育たない。この大会でも持って帰れるものがいっぱいあった。地区がわかりにくくなっているのも一つの要因だと思うが、まだまだ差別はある。解決するためには、熱が必要。

兵庫 自分の祖母は満州から帰ってきた。帰ってきてからもいろいろな差別を受けてきている。ムラの運営に入り、教員として、学校のムラの子もたちにも自分のことを話している。いじめと差別は本当にいけない。いじめ防止推進法、部落差別解消推進法は学校で守らなければいけない。教員は知識が中途半端。難しく、楽しくないと伝わってしまう。2学期にムラの人に来てもらって、学習会を行った。地区がない学校で、部落問題に関わる実践発表をしてくれた。水平社宣言は、差別を受けている人の権利をとりもどし、加差別の人とも仲間になりたいという話。同対審にも同じようなことが書かれているが、しっかりと読まないで理解されていない。昔、ムラの子の家について稼いでこいと言われた。いろいろなことがわかる。背景をみて、ピンチだと感じたら、それをチャンスに変えてとりこんでいかなければいけない。田舎の方では、ムラの子もたちが減ってきている。三重の報告から、先生以外の地元の人をそばに寄りそえることは大切だと思う。そのためには、見えないところで動かなければいけない。見えないところで動いて、差別をなくしていかなければいけない。いかに周りをまきこむか。地域包括センターを行政がつくってくれて、祭をしている。そこに、みんなが遊びにくる。楽しさをつくっていくことも大切。差別やいじめをなくすために、続けていかなければいけない。誰もやめなくて続けるためには、答えが一つではないと思うから、自分の考えをもたなければいけない。

大阪 部落差別の現実から学ぶという言葉は普遍

性がある。部落差別は、刻々と変わってきているが、部落差別をなくす方向には進んできていると思う。元静岡大学の黒川さんの久留米での講演で、主催者に事前にパワポを送っていたが、当日、市教委からダメと言われた。資料の中に賤称語があった。袴田事件のことをおかしいと話していたが、市教委からは最高裁で判決が決まっているからちがうことを話されたら困るといわれた。部落の地名がでているから困るといわれたが、地名はでていなかった。これが、今日的な部落差別の在り方であり、実際に広がることを拒否する問題がおきている。明治に運動をしていた人が、支援をもとめて手紙を書いたら、「あなたたちが明らかにし続けるならわたしは喜んで支援します」と書いていた。部落であることを明らかにして、なお、差別をなくすという原点に戻っていかねばいけない。部落であることを隠すということは、部落問題解消という面では課題だと思う。

高知 去年社会人になり、市役所の人権課になり、それまで同和問題を勉強したという記憶がなく、たまに自分の周辺から、あそこの人は怖いということもあったが、自分のなかでは、何のことかわからないまま過ごしていた。人権課に入り、勉強していく中で、あの時のセリフはそういうことだったんだと、同和問題に関する深刻さを知ってきて、これまでの自分にショックを受けて、そこから勉強してきた。部落解放研究の全国集会などにも参加してきて、ある人の人生のドラマなどの話を聞いて、すごいなと思った。解放新聞の中に、学校で同和教育をするうえで教員がどこまでつっこんだらいいのか難しいようで、江南市でも、教員に対してフィールドワークなどを行っているが、いざ子どもたちに教育するとなったら、地名まではっきりしていいのかという問題があったり、保護者からしなくてもいいという意見やもっとこうしてほしいという意見に板挟みにあっていたりしている。どうしていけばいいか悩んでいて、学校教育も大事だが、今日の報告で地域外の住民たちを巻き込んだ同和教育で、正しい知識や背景などを保護者が知って、保護者が子どもたちに伝えていくのもいいなと思った。

三重 今日の報告の子どもをずっと見てきたが、保護者の姿を見て、子どもたちは育ってきている。なので、今日の報告の二人の生き方をみんなに見せたかった。

三重 報告の小学校に以前勤めていた。報告などからも自分の自覚を再確認できた。以前、勤めているときに、生活綴り方を読みあう実践をした。ムラの子どもの語りで、「自分だけきつい言い方をされる。それをうるさいなどと言いついていた」まわりの子どもたちは、最初、本人の自己責任を話していたが、上から目線で見えていたという気づきがでて、話しあいをした。地区外の保護者とも話したときに、部落問題を語る機会でも人から指摘されて、差別していたのは自分だと気づき、気づいてからは構えないようになった。自分のあかんかったところを認

められる、そうすると自分も楽になるのにと話していた。自分も子どもに謝ることもできたし、部落問題を語ることは大事だと思うと話していた。社会同和教育あつての学校同和教育だと実感した。地域・保護者・学校が一体となって差別に向きあうことは、誰もが展望をもてる活動だと思え、自分自身もそのたびに問い直している。

—2日目のまとめ—

解放運動が始まってから大事にしていたことの一つとして識字がある。解放教育をやっていく中で、子どもたちがしんどい思いをなぜしているのかは、家庭訪問しないとわからない。運動そのものが変化してきている。その中で社会の変化とどう向き合うか。それは、水平社宣言にヒントがある。人間が楽しく暮らしていくという精神が貫かれている。運動し続けることが大切で、それぞれの運動が決してまちがいじゃない。水平社宣言が出た年に大阪で朝鮮人連盟ができた。翌年、韓国で公平社という組織が日本の水平社を学んでできた。水平社は部落の解放だけではない。部落の人だけがよくなればいいと思っていない。つまり、みんなが連帯していかなければいけない。知識を得なければ闘えない人もいる。その人を守っていかなければいけない。